

---

月 刊

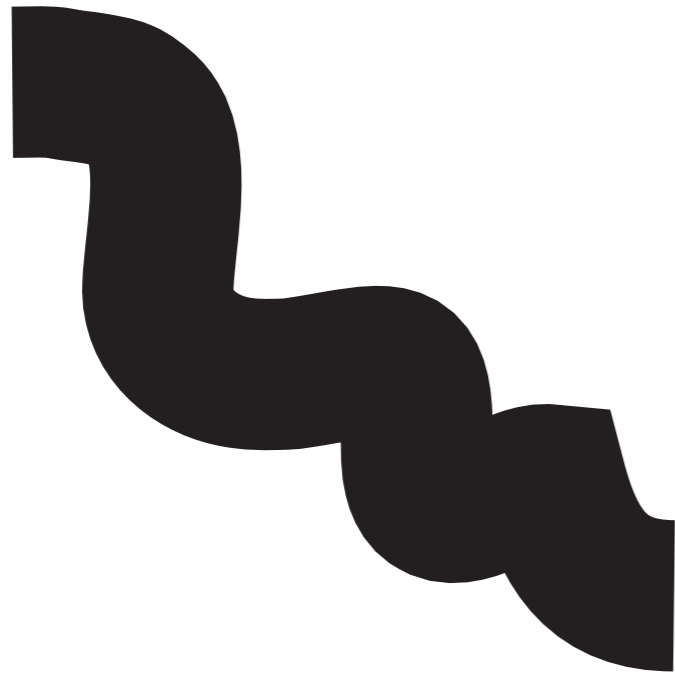
---

# MéLange

---

Vol.125

---



---

2017.07.23

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.125 2017.07.23

「月刊めらんじゅ」編集部

### 詩 & 俳句

チェシヤ氏らのカフカフ談義 ……福田知子 03

満月夜 ……黒田ナオ 04

カエルの会話 ……北岡武司 05

不白 ……中堂けいこ 06

かすかな ……大橋愛由等 07

七月の雨 ……高谷和幸 08

鳩詠 (俳句) ……岩脇リーベル豊美 10

発語の末路 ……野口 裕 11

土の器 ……有時秀記 12

骨董喫茶店 ……かなでかるも 13

牛 ……中嶋康雄 14

玄関 (HOME 連作) ……大西隆志 15

### お知らせ

20回ロルカ詩祭の誘い …… 09

### 連載 / 詩評・エッセイ

神戸詞あしび 114 「俳句と詩を横断する古田嘉彦の作品世界」 ……大橋愛由等 16

編集部日より★44/訃報がつづく。奄美を代表する詩人の一人である藤井令一氏が、2017年7月5日(水)に逝去された。享年87歳。図書出版まろうど社から評論エッセイ集『島尾敏雄と奄美』を2000年に上梓している。令一氏の文学的業績は、つみあげられた詩業だけではなく、永年にわたって奄美の地元紙・南海日日新聞に文芸月評を連載していたことにある。おおよそ奄美に関するすべての書籍、文献を紹介したもので、その価値は深く重い。それらは奄美の記憶になっている。また公表はされていないが、令一氏は日記を綴っていて、奄美文化の中心的位置にいたひとゆえに、その交遊録もまた奄美にとって知的財産になってゆくだろう。令一氏は写真も卓越していて、20年間奄美で生活した島尾敏雄一家の家族写真を撮りつづけてきたことから、未発表の写真も発掘されるかもしれない。これも期待したい。晩年は体調をこわし、今年一月なひさしぶりに令一氏と会おうと思っていたが、すでに施設に入所されており、面会はかなわなかった。ひちすら残念である。これでまたひとり奄美から詩人が旅立っていった。次の世代の詩人はきつと現れると思うが、令一氏の詩業はしっかりと受け継いでくれるだろう。(大橋記)

## ◆ チェシヤ氏らの カフカフ談義

福田 知子

―で、きみはどこに行きたいの？  
―む・・・どこでもいい、さ  
―きみは？  
―・・・落ち着いて眠れやしない

世界中の幾人かのチェシヤ氏たちが集まり  
フカフカ布団に寄り合いながら小声で何やら  
密談している

―耳を傾けてほしい：状況はこうだ  
―極度に圧縮された缶詰がベルトコンベア  
を流れている  
―ラベルには【四つ足動物専用】と書かれている  
―がどうやら一部のニンゲンにも最近需要が  
高まっているらしいニクキュウ共和国に  
―クーデターが起きてからのこと  
―また 鉄の鳥がビルにぶつかって以来  
―てろてろてろてろと魚のぬめりまで喧し  
くなつて  
―裏で武器を流す密売商や  
―ついでに転売されたり殺されたりする猫  
―もあとをたたないという  
―それから  
―何年も美容院に忘れおかれた女性週刊誌  
―にはついにかのパープル・パレスにまで  
―及んだ

老人いじめのスキヤンダラスな記事が掲  
載されている  
―だが不思議なことにだれも頁をめくった  
痕跡がない  
―これら三つの事例をとってみても  
―煙に巻かれる時代さえすでもう終わっ  
てしまったことは  
―白日のもとに曝されたその証拠だ

こうした最後の密談の後  
―どうもチェシヤ氏たちは密かに二足歩行に転  
じたようなのだ

かつての寄り合い場には  
―埃を被ったエア・カーテン  
―作動しなくなったエア・カーテン  
―カーテンのないさびしい区切り  
―検査官たちが「安全」と書かれたお墨付きシー  
―ルを張り付けやつてきたのは  
―「物故世代人間歴史博物館」で働くニンゲンた  
ちと

それから 二足歩行に転じたチェシヤ氏たち

―すでに取り壊された記憶―その寄り合いの記  
憶を彼らから消すように  
―その場は当初から無かったかのように 完璧  
―に一掃されている  
―ひとたび入場するところではどんなお喋りも  
―ご法度だ  
―むやみに集会をひらくものは またそれを見  
―聞きしたとき公に告知しないものは安全の認  
―識が甚だ低い野蛮猫だという別の新しいレッ  
―テルが貼られる  
―彼らはコンベアに乗せられ 多いときは鉄道  
―で運ばれ どころで煙に巻かれてしまうのだ  
―集会をするようなバカものどもは いっそ巨

―大きな部屋に閉じ込めておくのが一  
―番だという同盟国のトップのお言葉により  
―両国 いや世界中の国のほとんど  
―が巨大なドームとなったのである  
―それは国民全体のためになるイイコトだ  
―から。  
―間違いないイイコトなんだからねえ。  
―こんなわけで世界中が巨大ドームと化し  
―たのである

一方 免税店で売られているのは  
―いっばいに積まれたカートン単位の膨大な量  
―のブツ  
―威嚇するブツの山また山・・・

―ああ 昔のように寄り合つて雑談した  
―い！  
―で、どこに行くつもりかい？  
―どこでもいいんだ 心置きなく雑談でき  
―る  
―ところなら  
―でもこの国のどこをどう探したつても  
―うどこにもそんな場所はない！  
―じゃあ この国を煙に巻いてしまえばよ  
―いのではないだろうか？  
―しかし禁煙政策でタバコの煙さえ消えた  
―のだから致し方ない。  
―だからこうして世界中を旅しているのだ  
―けれど：  
―ボクたちが宿る樹の上にもついに【禁・雑  
―談】という札が掛つた！  
―・・・・・ふくむ・・・・・

世界中の善良なる皮肉屋のチェシヤ氏たちが  
―消えたのは

## ◆満月夜

黒田ナオ

月の美しい夜だった。仕事帰りにうっとり夜空を見上げてみると、両足だけが勝手に、前へ前へと急いで歩き始めて。気がつくとは私は、太腿の付け根あたりから取り残され、両足が無くなっ

てしまっていた。歩けない私は、そのまま家に帰ることもできず、街灯の下で頼りなく宙に浮かび、ひとり途方に暮れている。街を歩く人々はみな忙しそうで、足の無い私のことなど誰も見て見ぬ振りをして、足早に通り過ぎて行ってしまうのだった。

そのときだ。滑るように流れて来た一台のタクシーが、すぐそばで音も無く止まり、運転席から男が声をかけた。お困りでしよう、お乗りなさい。ドアが開いた。足の無い私はドアを掴み、腕に力を込め、自分の身体を引き寄せるようにして、ようやく車に乗り込んだのだった。

ときどきいるんですよ、こんな夜にはね、貴方みたいに足の無い人が。そうなんですか、と言いながら私は、ミラーをのぞいて男の顔を確かめようとするのだが、暗くてよく見えない。男はそれ以上は何もしやべらず、タクシーは静かに出発した。私は自分の住所を伝えると、窓からぼんやり外を眺めていた。今頃私の両足は、いったい何処にいるのだろう。

何もかも吸いこまれてしまいそうなほど大きな月だった。窓からぼんやり見上げているのだが、タクシーはなかなか家まで辿り着けない。どうもおかしいなと思っていたら、どうやら車はいつの間にか私の家の前を通り過ぎて、どこか知らない場所を走り始めているようだった。目を凝らし、外の景色をじっと見ていると、私は自分の両足がまだ家に帰らず、公園の茂みの中にいることに気がついた。買ったばかりの赤いサンダルを履いた両足は、草むらで知らない男と絡み合っている。ちらりと一瞬、見かけただけだったのだけれど、そのときから男の少し汗ばんだ手の感触が、そのまま私の身体にまで伝わってくるので、よくわかった。

運転席の方を見ても、私の落ち着かない様子に気がつかないのかどうか、男は相変わらずしゃべらないし、その表情もわからない。ただハンドルを握る、白い手袋をはめた両手首だけが、月の光の中で、まるで別の生き物みたいに、いつまでも静かに動き続けているのだった。

## ◆カエルの会話

北岡武司

何？何？ クワア？ クワア？ クワア？

ほうら、ル・ジャポネ、ヴォワラ！ 煙草買いに行く

ウイツ、ウイツ、セサ！

ほうら、乞食たち、ヴォワラ！ 急に笑顔で立ちあがる

ウエイイ、ウエイイ、ウエイイ、ヴォワラ！

煙草一本もおうと ぞろぞろル・ジャポネの後を

アレツ、アレツ、ヴォワラ！ それ行け、ヴォワラ！

何？何？ クワア？ クワア？ クワア？

ほうら、ル・ジャポネ、ヴォワラ！ ユーロ一六九円

キャメル・フィルター二十本、五ユーロ二十

ほうら、バカ・ジャポネ、ヴォワラ！

タバックからでると 乞食たちのお出迎え

皆に一本ずつやって残り十三本

アレツ、アレツ、バカ・ジャポネ、ヴォワラ！

ほうら、ル・ジャポネ、ヴォワラ！ 公園からお帰り

ウイツ、ウイツ、セサ！

ほうら、乞食たち、ヴォワラ！ 缶ビールもちあげ悦ぶ

ウエイイ、ウエイイ、ヴォワラ！

乞食たちの整列だ

バカ・ジャポネまねて お辞儀 代表一人小銭もらい

七人口々に メルシ・ボク、ムシユーと愛想ふりまく

◆ 不<sup>ふ</sup>白<sup>はく</sup>

中堂けいこ

と、これら う、おそらくは休止、とびちろうわたしのマウスピースの  
うきあがり艶めく声をうつされ う、歯噛み  
松友の松は一筆になり

黒々の闇から空白のうきあがるさまを

と、やかましい空壁をつたう水は と、さみだれて

わたしは石をすりメデイウムを練りこみ空をみつしりと埋めるのだった  
ちがうな

写生ではないよ

眼前ではりはりと松葉をはむ下あごは関節におさめ

野太い声の一筆にたくさねばならない

## ◆ かすかな

大橋愛由等

発酵する椅子には座れない

(乱舞する蝶たちにさくられまいと隠す。またひとりカバンも  
持たずに旅立ってゆくひとがいることを。知っているつもり、  
語ったつもりを重ねてゆくうちに隠しきれなくなったこの雲  
の下の俚言どもと今日も暮らしている。昼下がりのアッサ  
ム紅茶を思弁的に呑む方途を考えているきみがつけていた昨  
日のペルソナの色がどうしても思い出せない。それは整理し  
ていない地下に眠る腕章に書かれた五文字の解説がまだ済ん  
でないことの証左なのか。「ああ、やつぱり」とありていに  
声を出してめくつていなかったカレンダーを一枚やぶつて夏  
の絵柄を確認したぼくはそのアボリジニの神話世界を妬みな  
がら見つめていた。昨日からじつとしている百足の脚を数え  
てみようかとまなざしを向けた北北西の方角からあなたが錯  
乱した時の溜息の音がかすかに聞こえた。単語カードにはや  
はり世界の断片かけらと小夜鳥さよからずの鳴き声と鶏とりが地を蹴り上げる音群  
れを記述すべきなんだと朝の公園で出会った少女に云つてお  
こう。石たちが流離譚から逸脱しようと決意したことを伝え  
にきたのもその少女だったから。そんな時「それはそれでそれ  
なんだから」ときみから言われたら納得してしまえばぼくは母  
の遺品であるツゲの櫛の歯のような整合性が欠落しているの  
だとうつぶわいていよう。もう生者たちだけが跋扈する季節で  
はないことは分かっているつもり。そして今日どこにどのよ  
うに座るのかを問われるとしよう、ぼくははにかみながらこ  
う答えるのにちがいない、「流体であらねば」と。

## ◆七月の雨

高谷和幸

重い水。離れたところで重い雨。衝撃で歪んだ草木の四角の一边がその名辞を斜めに(まっすぐに近づくことは不可能です)、上から落ちてくる(逆に上昇する時間をためているようで)、重い水。そのものたちのシナリオに四角が(宙から、遠くを見渡すようで)登場するのは「最近のことです」木が先端から爆発するのをわたしたちは見覚えていきます。そのそれぞれにあつた記憶の、離れたところに重い雨が降っていて、それを見守っていた、ふくよかな女性の樹木形をした音韻を愛していました。わたしたちは決して、「それを聞くのです」名辞と動詞が結合したそれは不思議な数字でできてくるようで、決して、それは「近代の四角」と呼べるものではなかった。雨の中で、晴れた日もあつて、空にはくろい躰をした二つの鳥がその距離を保ち、「地上のわたしたちをさえぎつて」そこに斜めに時間が捧げられていたかのように、どうやら隔てたところで降る、「七月の雨」を持ってしまったようなのです。

# 第20回

# ロルカ詩祭

## 2017年8月19日(土)



VEINTE: 20 ー 熱い夜。福田 知子

どこの国でも 死はひとつの終わり  
死が来て幕はとざされる  
だがスペインではちがう  
スペインでは幕がひられるのだ  
(ガルシア・ロルカ)

ときにロルカは予言めいたことを書いている。ロルカのこうしたインスピレーションはどこからくるのか…スペインには《DUENDE デウエンデ》という翻訳不可能な魅力的な言葉がある。DUENDEこそ芸術を芸術たらしめる根源的なものであるとロルカは言う。ロルカの気質のうちに、故郷グラナダという風土のうちに、こうした言葉の精霊が揺蕩っているのではないか・・・ふらふらとグラナダの町を歩いていると、ふとそんなふうに見える。グラナダの対岸はアフリカ大陸だ。頭の中の地図がそう説明する。しかしながら、あまりの熱気でふわり空中に浮くような感じを体感するやいなや、頭の中の貧しい地図は消え去り、熱波にざわめく空気と尖ったオリーブ、乾ききった砂やゴロ土に覆われた丘陵が浮かんでくるのだ。

1936年、ロルカがグラナダ郊外のビスナールで、自らの墓穴を掘らされこの辺りを席卷していたフランコ将軍率いるファランヘ党に銃殺されたことは周知のことだ。私は昨夏、この地を訪れ、おそらくロルカが殺されたであろう場所に、ロルカゆかりの誰かが“花束”を投げ入れ、手向けられていたのを見たとき、乾き切った身体奥底から清水が湧き上がってくるような感動に浸された。乾燥地帯であるに拘わらず、その花束が鮮やかな色をとどめていたからだ。スペインでは、死はひとつの終わりではなく、ここから幕が開かれる…ロルカの言葉がまさに現前した瞬間であった。

今年で「ロルカ詩祭」は20回を迎えます。阪神淡路大震災の翌年に追悼詩祭として始めたロルカ詩祭。この20年の間にロルカ詩祭に参加した親しい詩友たちもまた他界していきました。布村真理、磯田ふじ子、西谷民五郎、寺岡良信、そしてこの6月にはロルカの傑作「イグナシオ・サンチェス・メヒアスへの哀悼歌」の朗読で我々を魅了した富哲世も逝ってしまいました。

演奏はロルカを愛し、ロルカを歌い、ロルカを演奏する《ゲルブ Guelber Richat ensemble》の皆さんを東京からお招きしています。詩と音と声からどんなコラボが生まれるか…どうぞ、皆さまお誘い合わせの上、ご来場くださいますようお願い申し上げます。

### 〈詩祭スケジュール〉

8月19日(土)午後5時 開場

〔1部〕PM5:30～PM6:00

Guelber Richat ensemble 演奏

ロルカ詩の楽曲演奏

〔2部〕PM6:15～PM8:30

詩人たちの自作詩朗読

《場所》スペイン料理カールメン(神戸市中央区北長狭通1-7-1 電話078-3331-2228 6500012)  
JR・阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩三分。  
《料金》A:3600円チャージ込み(1)夏の特選ス  
ープ(2)季節のサラダ(3)メインディッシュ  
(4)パエリア(5)コーヒー(6)デザート  
B:2000円チャージ込み(1)ワンドリンク(選択可)  
(2)特選タパス  
《特典》当日参加者の方全員に、第二部参加の詩人たちが朗読する詩作品掲載の『八月・九日詩集・VOI.20』を進呈します。

### 出演予定者

朗読詩人/  
鼓直、金里博、

今野和代、情野千里、大西隆志、高谷和幸、  
中堂けいこ、北原千代、大橋愛由等、千田草介、  
安西佐有理、福田知子、秦ひろこ、  
中嶋康雄、黒田ナオ、にしもとめぐみ、北岡武司

演奏/  
Guelber Richat ensemble

(ゲルブ・アル・リシャット・  
アンサンブル)

スペイン料理 **カールメン**

〒650-0812 神戸市中央区北長狭通1-7-1  
TEL. 078-3331-2228  
阪急神戸三宮駅西口北長上30M南側2F

## ◆鳩詠

岩脇リーベル豊美

古すもも枝に巢懸ける鳩の恋  
はらはらと子連れ鳩飛ぶ麦の秋  
飛べるつていいね薄灰色のはね  
くちばしの母による特訓飛ぶために  
なにがほしい訊けど啼けど食糧あり  
鳩の啼く夏至の真夜や仄明るき  
雛孵る母鳩動じず異端者近づく  
父らしき鳩を初めて見た子巣立つ  
クックルルー枝に戻るや通い母  
木漏れ日に研ぐ嘴突如翻る夏至  
若き鳩新聞配達バイクと共に唸る  
空の巣にむらむら愛が立ちこめている

## ◆発語の末路

野口裕

なだるる前に  
親和性が試され  
かきまぜると  
かきまぜて  
かきまぜられると  
かきまぜられて  
自と他はどうしようもなく  
入り乱れ  
一行野郎とののしられ  
しかし一行が生み出せず  
霧の無明に多行が浮かぶ  
同行二人というが笠は無用  
無量大数まことに頼りとなるのか？  
ころみに一本取り上げ  
そろそろと進めば  
転がる話には伝説も生まれようが  
踏みとどまって抗えば  
よろめきつつそこらをよたよたと  
出鱈目の足跡が生むリズムに  
ああ  
ようやく一行野郎となった

肉じゃがの煮崩れてゆく青山河

## ◆土の器

有時秀記

村からやってきた一人の男が灰の降る街に立つ。身体に防護服を着て、目にはゴーグルを付け、降りしきる灰を避け一昼夜になる。山頂からマグマが流れて来るわけではないが、既に堆積した灰は五十センチを超えて止む気配はない。

その人物が村からやってきて灰に遭遇したのは偶然である。彼は祖先から伝来の書に記された土の器を灰の降る街に探しに来たが、土の器はいびつな球形で、少しばかり遮光器土偶に似て、外部から中を見ることはほとんど不可能と伝来書には記されている。土器の在り処は地図によってほぼ特定されているのだが、予想もしない降灰により不確かである。

灰が降るなかで立ち尽くし、彼は意識を集中させ、助けに鷹を呼ぶ。鷹は灰の降る山頂よりも更に上空から声を発するが、鷹の中でも特に優れた超感覚を研ぎ澄ますことができる鷹である。鷹の鳴く指示に従って、土の器を降灰のなかから見出すことができたのは、三昼夜を経た夜明けのことである。

土の器は降灰の中からわずかに頂部を見せかけていたが、灰を取り除くと、灰煙りの中から現れ、わずかな覗き穴が二ヶ所あると判る。熱気を帯びていたが、すぐさま村へ持ち帰り、彼は村の一隅で土の器を凝視しながら、伝来書に記されている言葉を思い起こす。

「土の器のなかには、語り得ないものが収められ、それは〈名づけ得ぬもの〉と名付けられている。」

二ヶ所の覗き穴から灰を取り除くと薄明かりのなかに丸みを帯びたものがかすかに見える。鷹が鋭く鳴くと、同時に男の眼からの反射光が二ヶ所の覗き穴に差し込み、〈名づけ得ぬもの〉が眼差し先で光を放ち始める。丸みを帯びた円盤状のものが土の器のなかで光ながら回転し始めるのが、覗き穴から見える。回転は速度を増し、高速回転し高熱によって土の器は鋼色の土器になる。二ヶ所の覗き穴からは炎のような光が噴出して、彼の眼光と合流するかのようである。伝来書には書かれている。

「我ら光のなかを歩もう。〈名づけ得ぬもの〉からは絶対的な光が発せられる。その光のなかを歩め。その光が走る道を歩め。その過程で得られる光の言葉は真なる言語だ。当初、子音だけで成り立つが、その後、子音に母音を付加した言語となる。その光速言語は色彩を持ちあらゆる数値と関連し、その光速言語を素とする構成言語はあらゆる神聖性と絶対真理の表記が可能である。」

器の覗き穴から噴出する光は光速度で言語の断片を撒き散らしながら、「パペ、サターン、パペ、サターン、アレツペ」と意味不明の言葉が発せられるかとおもえば、「ラファエル、マイ、アメツケ、ザビー、アルミ」と再び意味不明の言葉が発せられる。

しかし、伝来書には記されている。「初めに意味不明の言葉がこぼれ落ちる。そのち、統御された普遍言語が現れるであろう。」

しかしそれには長い年月がかかる。だから普遍言語を構成するための構成言語は光速度で書き起こされる。汝の祖先からの使命として絶対原理を書き表すことの可能な普遍言語が構成されるであろう。その言語で祖を内包した汝自身の存在史と存在論を書き記すことが使命となる。」

土の器は言語発生原器であったのか。

さらに伝来書は結語を書き記す。

「二つの覗き穴に合致する鍵を作り出すことだ。精密な鍵があれば、土の器を開くことができ、内部の回転の本質を見抜くことが可能だ。ただし、創作された鍵で開くことができたなら、器のなかの本質を直ちに観取せよ。それはまさに〈時が満ちる〉瞬間である。そして時が満ちた瞬間のうちに器は二分割分されて円盤状のものが二つ飛び出し、二艘の飛ぶ船になる。ひとつは真空の果てへの旅に出發し、それに呼応しながらいまひとつは無限記述の旅に出發する。」

街ではそのあいだも灰が降り積もり、逃げ遅れた動物も植物も灰の下に埋もれていくが、〈時が満ちる瞬間〉に、降灰は停止する。生命の場は転移するのである。二艘の光速船が、転移してのちの場の基軸となり、男と鷹はそれぞれの船に乗って街と村から永訣する。

伝来書には追記がある。「二艘の船は、バベルA、バベルBと名づけられ、周回軌道のいずこかで合流するだろう。その合流の場こそ待ち望まれた絶対の生命場だ。生命の火花が飛んでいる場だ。」

## ◆骨董喫茶店

かなで かるも

僕がようやく辿り着いたのは、丘の中腹南斜面の道路沿いの石造りの建物だった。

僕がそこを気に入ったのはそれが単なる石造り風なのではなく本当の石造りであったからだ。石はそのあたりから集めてきた質の悪い石灰岩で、砂っぽくて黄ばんだりくすんだりしていた。

僕は建物の外観よりもむしろその内部が気に入っていた。石の内壁には貝殻の化石が見つかつた。壁も乾いていたが松の天井や床も乾いていた。そのため、明るいコーヒーの香りが何の濁りもなく漂っていた。

いつ訪れるときも僕は自分の居場所を決めていた。貝殻の付いた大きな素焼きの壺とニフの石像の間に僕の古いソファアの席があった。そこに座ると例えようのない幸福感の中で自分の骨が快い音を立てながら震えているのが分かつた。

その日も室内は乾燥していて暖かかった。窓の外には南の空が輝いていた。光を浴びながら、僕は自分の身体が骨董品と共に暖まり、骨という骨が石のように乾燥してしまふという不安な幻想に酔いしれた。流砂の音がアラベスクの旋律を終わることなく流し続けていた。ギターの総ては砂になるだろうという予感が気持ちよかつた。

その眠気を妨げる乾き切った流木のような男の声が絡まつてきた。いつの間にか知らない二人の男の姿が斜め向かいの席に座っている。まるい背中を向けているのは白髪混じりの五十歳代の男だがもう一人その男の影に隠れてこちらを向いているのは二十歳代の若い男だった。その若者がこちらの方を時々睨むように伺っている。

目の前の中年男にかなり気を使っているようで、おとなしく彼の話に耳を傾けているようだが、その若者には何処かで出会ったことがある。その首筋の筋肉が特徴的だ。山の上のスポーツセンターの鏡で見たことのある顔だ。

中年の男のぼそぼそとした話口から聞こえてくるのは、「サナトリウム」「治療」「幻覚」「睡眠」といった単語である。

二人のテーブルの上には何やら写真が乗っていた。僕が手洗いに立ち、その前を通りすぎようとすると、中年の男はそれを何かいかがわしい写真のように隠そうとした。用を済まして席につくと彼ら二人の会話に手に取るように聞こえてきた。どうも僕が帰つたものと勘違いしているらしい。

「この男を知っていますか？」

「さあ、こんなに崩れていると、良く分りません」青年は、必死で表情を変えない努力をしているように見えた。

「誰がやつたんですか？」と、青年は聴いている。

「それが分らないから君に聴いているんじゃないか」と、胡麻塩頭の男は突つかつていた。

「へえー、こんなにたくさん写真を見なくちゃあならないんですか？」

「大変だけど、一人でも名前が分ればいいんだ」

ちらつと見た僕の感じでは、それは検死写真だ。名前のない死者は恐ろしい感じがした。単なる物として転がって、完全に自分自身の居場所を見失っていた。

## ◆牛

中嶋 康雄

牛が立っている  
大男が裸で電球を入れ替えている  
入れ替えても入れ替えても  
電球は点灯しない  
雨の中を小学生の傘が走ってゆく  
車が水飛沫を跳ね上げて走り過ぎる  
びしょ濡れになった牛が  
小学生をくわえている  
景色が塗りつぶされてゆく  
コーヒーズをずっと待っている  
もうどれくらい待っただろう  
小型の台風が通り過ぎる  
空からミルクが降ってくる  
それでもコーヒーズはまだ出されな

店主が老いて倒れてしまう  
もう閉店だから外に出るしかない  
牛が黄金になり敬われている  
霧がたちこめている  
牛が涎を垂れている  
涎の河をカタツムリが渡っている  
ひよこ売りがピンクのひよこを売っている  
材木屋の長男がひよこを買っている  
どうせすぐに死んでしまうのに買っている  
材木屋が買ったピンクの一羽が  
奇跡的に鶏に成長する  
毎朝うるさく鳴くようになると  
これを材木屋一家と隣組ですき焼きにして  
食べる  
食べられていなくなつたはずなのに  
朝になるとまた鳴いている  
やかましい  
眠りを妨げられる  
ブリキ屋が材木屋に苦情を言いに行く  
「いえ、もう鶏はいません」

「鳴き声が聞こえるじゃないか」  
「あなたも一緒に食べたじゃないですか」  
毎朝繰り返される押し問答  
後ろで聞こえる婆さんの念仏  
電線が切れて垂れ下がっている  
蝉が電柱にとまって鳴いている  
朝顔がもう萎れている  
黒い種が鉄砲のようにはじけ飛ぶ  
鶏が落ちた種を啄んでいる  
「そこで食い意地張っているのが見えない  
か」  
「見えるなら捕まえて食べばいい」  
ブリキ屋が照焼きにして食べる  
翌朝聞こえる  
鶏の声  
後ろで聞こえる婆さんの念仏  
婆さんの七回忌の法要が営まれる  
びしょ濡れになった牛の金メッキが剥げて  
いる  
くわえられた小学生が夢精する

## ◆玄関 (HOME 連作)

大西隆志

扉を押すと  
脱ぎ捨ててあった多くの靴のために  
気圧の谷に入ってしまった  
玄関での悶着は待つくれません  
小さな家の出入口、大きな家は玄関での躓きさえない  
サンダルとブーツで季節がひっくり返っている  
魔除けのシーサーの置物がジャワの艶かしい女神と共に  
人の出入りを見守っているのかしら  
誰かが出て行き  
遠い国から訪ねてくるものもある  
開かれている、そして閉ざされている  
埃だらけの電灯と明り採りに嵌め込まれたガラス  
光よ、踏み場もない場所に人が溢れているかのように  
障子の向こうで息をひそめ、靴紐は結われてしまう  
犬も猫もここはこころよい場所ではないよう  
障害物競争のように置かれた菱形の枠  
線り返し立ち止まれば玄関は  
何気なくの日々に罅を入れるように  
帰り着くことのできない場所に  
家人を導いていく  
風が吹き抜けているはずなのに  
昨日も明日もステックを手にするように頼りない  
すべての靴音も磨ぎをかけられ収まっている  
呼鈴には電気が通じていない  
発火する恐れもないようだ  
扉の向こうもこちらも  
誰かを待っている  
踏み込んだ者の戸惑いを  
窓から逃れる時間を  
玄関は触発する





奄美群島・沖永良部島の珊瑚

古田作品は、前書きの多弁さが特徴である。この句の前書きは「歓喜」についての考察があり、感情そのものの省察がなされている。句では紫陽花が呼吸困

詩と俳句を横断する古田嘉彦氏の句集『展翅板』（邑書林）の書評を、俳誌「吟遊」に執筆した。ただ、紙面の関係で、すべてを書き記せなかつたので、その続編を掲載しようと思う。

冒頭に引用したのが、句集に掲載されている一句である。ト書きにしては長く、かつ散文詩のようでもある（古田氏は詩人でもある）。ト書きと俳句がひびきあっている。

句集の後半からこのようなト書きとは思えないような長い前書き付きの作品が頻出する。もちろん俳句作品の常套である句の前振りや説明ではない。散文詩のようであり、前書きと俳句が対話しているようでもある。過去いくつかこうしたタイプの俳句を読んできたが、

## 俳句と詩を横断する 古田嘉彦の作品世界

この句集はわたしに多くの刺激を与えている。古田俳句

本当の歓喜は言葉にならない。嘆きも。言葉にできる程度であれば、嘆きというに値しない。歓喜も嘆きも、ただ息を詰まらせ、言葉を失う。しかし慰めは、励ましは、言葉になる。

まだ生の階段で紫陽花の呼吸困難

難になっていることを示すことで、歓喜と嘆きという両極端なありようの葛藤を表象し、その葛藤が「生の階段」という場所を現出させている。

こうした解説が作者の意に反するというなら、「工房ノ一ト15」（句集のあとがきに代えて執筆された作品の自己解説文）を引用してみよう。「俳句で試されているのは、裂け目の深さである。それを深くするのは、重い一面、痛みを感じる一点―による。―距離―では深さの感覚に至らない。」

〈裂け目〉とはいったいなんだろう。詩句と詩句の連関性の向こうにあるもの。詩句と詩句を成り立たせているひとつの場が〈面〉であり、あるいは句を成り立たせる〈点〉は瞬間的な感性なのだろうか。〈距離〉は空間の移動性ではなく、ひとつの固形した場と感性を重視しているのかもしれない。

は季語を使うこともあるが、文化コードとしての季語の機能を、句を成り立たせる必須の要素としては指定していない。季刊で発行される俳誌「吟遊」が郵送されてくるとまっさきに読む作家のひとりがこの古田氏の作品なのである。この句集でもそうだがおおよそ一行詩の体裁を守っている他は、俳句の俳句性（「十七音字」「切れ字使用」「季語を使う」といった規範性とまつたくことなるモードで作句されていて、爽快そのものである。わたしの俳句づくりの迷い（やはりどこか俳句性を活かした句づくりをした方がいいのではないか）をきつぱりと断ち切ってくれるし、俳句という詩型に対する覚悟の深さを古田作品から学ぶのである。これからも私はこの古田俳句を分析・評論していくことで、わたしの作句姿勢に反映していこうと思っている。

詩と評論  
月刊「Mélange」Vol.125  
神戸

2017年07月23日 通巻125号  
発行所/月刊「Mélange」編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F  
編集・発行人/大橋愛由等（「Mélange」同人）  
maroad66454@gmail.com  
定価600円(税別)